

## 現代語タヨルにおける格形式と用法

松野 美海 (名古屋大学大学院)

### 要旨

本稿では「叔父 {ヲ/ニ} 頼る」のようにヲ, ニの両格形式が許容される現代語タヨルについて, 次の差異を記述した。①ヲ格例は中止節内に集中し, 後続節に移動動詞を伴う例を典型とする。ニ格例は中止節内への集中が見られない。②ヲ格例はヒト名詞類が9割近くを占め, ニ格例は非ヒト名詞類をとる例が8割弱を占める。

これらから〜ヲ/ニタヨルについて, それぞれ次のように特徴づけられた。【〜ヲタヨル】タヨルが表す事態(以下、「依拠」)の成立する場面(主体の存在場面)とヲ格名詞(句)とが同一場面にあることを要求しない。これはヲ格例に心理的依拠の表示例が多い点, 依拠の内実が明示されないことが多い点と関係する。【〜ニタヨル】ニ格名詞(句)は依拠と同一場面での存在が要求され, ニ格例は手段や基盤等, 実際の利用が想定されるものが多い。

またタヨルの格選択に, ヲ格が一般的に持つとされる「全体(への影響)性」が関与すると指摘した。

### 1. はじめに

現代日本語「頼る(便る)」(以下, タヨル)は(1)のようにヲ/ニ格のどちらもとる。

(1) 太郎はいつも親 {を/に} 頼っている<sup>1</sup>。

このようなヲ/ニ格が交替可能な動詞は少数ながら存在するが, 詳細な検討は多くない。本稿では, タヨルがヲ/ニ格をとる場合の特徴をそれぞれ記述し, 格形式と意味用法の対応関係を探る。

#### 1.1. 本稿の位置づけ

ヲ, ニ両格を許容する(ヲ/ニ格両用の)動詞は, タヨルのほかにも存在する(例(2))。

- (2) a. 花子は北海道土産 {を/に} 喜んだ。  
b. 花子は理不尽な仕打ち {を/に} 怒った。

ヲ/ニ格交替現象はヲ, ニの問題でもあり, 動詞の問題でもある。ヲ, ニの機能については多くの研究の蓄積があるが, 両格を許す動詞においては, なぜ格交替を許すのか, 格交替を許さない動詞との違い, ヲ, ニの機能とどのように関係するかといった相互に絡み合う問題が十分に解明されていない。これらの解明には, 事例研究を積み重ねることが不可欠である。

<sup>1</sup> 注記がないものは稿者の作例, 括弧内に注記のある例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の用例である。

ヲ／ニ格両用の動詞は多くないが、感情動詞にいくつか見られる。ヲ／ニ格の一方のみをとる感情動詞については、寺村(1982)が一時的な感情とニ格、能動的な感情とヲ格の関係を、加えて益岡・田窪(1987)が持続的な感情とヲ格の関係を指摘しており、格形式の違いによってある程度の意味的差異があると考えられる。しかし両格を許す動詞については、益岡・田窪(1987)が語例を挙げてその存在に言及するに留まり、他の論考でもヲ格をとる語群とニ格をとる語群の違いが中心に論じられることが多く<sup>2</sup>、存在の指摘はあるものの、ヲ／ニ格両用の動詞がそれぞれヲ／ニ格をとる際の用法や条件を詳細に検討した論考はあまり見られない。

その中で「喜ぶ」についてはBANDO(1996)、佐藤(1997)等で考察されており、ヲ格名詞は対象、ニ格名詞は原因または対象の役割を担う<sup>3</sup>とされる。しかし例えば「憶れる」や(1)のタヨルのようにヲ格が対象、ニ格が原因とは捉え難い語がある<sup>4</sup>。これらの格形式別の差異は具体的に検討されておらず、感情動詞に限らず両格を許す語についての考察を積み上げる必要がある<sup>5</sup>。

タヨルは、心理的意味を持ち、かつ対象、原因という枠で捉えることが難しい語のうち、ヲ格をとる例とニ格をとる例(以下ヲ格例、ニ格例)がまとまって得られる語<sup>6</sup>である。タヨルは物理的であれ、心理的であれ、ある種の「依拠」を表すと言える。以降、本稿ではタヨルの表す意味について言及する際は「依拠」と称する。

森田(2007)では「地図を頼る／地図に頼る」の場合、ヲ格例では「頼る対象が地図そのもの」であり、ニ格例の場合、ヲ格が現れていなくても「“地図にそこへの行き方を頼る”」というような「必ず何かをその対象に求める行為で」(p.265)あること、その場合にのみニ格モノ名詞が現れることを指摘する。ただ森田(2007)はこのことを簡略に述べるのみで、実証的に示したのではなく、ヲ／ニ格名詞(句)の内実や、「何かをその対象に求める行為」である場合のヲ／ニ格例の差異等不明な点が残されている。

本稿では実例に沿って～ヲ／ニタヨルの差異を明らかにする。2節では従属節内での現れ方を、3節ではヲ／ニ格名詞(句)の意味特性を記述し、4節で考察・まとめを行う。

## 1.2. 調査対象

本稿の調査は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)所収の「書籍」を対象とし、「中納言」によって検索した。対象を書籍に限定したのは、他のヲ／ニ格感情動詞に関して、用例数が膨大になる語は書籍に限定して調査していることから、のちの比較の便を鑑みたためである。また、より書き言葉的な文体のほうが格助詞の省略が起こりにくいこと、書籍の資料にも様々な文体があり、ある程度文体の幅を確保することができることから、ブログや新聞ではなく書籍を対象としている。

<sup>2</sup> 杉岡(1992)、三原(2000)、浅山(2000)等。

<sup>3</sup> 佐藤(1997)ではニ格名詞句は原因のθ役割を担うとする。BANDO(1996)ではニ格名詞句は原因と対象の役割を同時に担い、対象の場合にヲ格名詞句と交替可能だとする。

<sup>4</sup> ほかに「髪{を／に}さわる」「宿{を／に}あたる」など。

<sup>5</sup> 現代語において心理的意味を含まない動詞で、両格を許すものについて具体的に考察されたものに、定延(2006)の「訪れる」、秋元(2010)の「触る」がある。

<sup>6</sup> 『CD-ROM版新潮文庫の100冊』における事前調査により、まとまって両格の用例が得られた。本稿では小説以外にも調査対象を広げるため、BCCWJを使用した。

タヨルは「叔父に進学資金を頼った」のようにニ格とヲ格が共起する場合があります、一文中にヲ格のみ又はニ格のみが明示されている例を、共起例から一方の名詞(句)が省略されたものと見る可能性もある。しかし(3)のように、ヲ格名詞又はニ格名詞の省略と見なせない例も存し、省略された例か否かについて客観性を担保して判断することは困難である。

- (3) a. 今、こうして私が眺めている光景をおそらく 同じように、二人も肩を寄せ合い 仲むつまじく眺めていたのだろう。成田は甘ったれて佐知子に頼り切り、それを 佐知子は深い喜びとともに受け入れていたのだろう。(大崎善生『将棋の子』)
- b. 「いくらガードが堅くても、守れないものはあります。威張っている人ほど、内心は不安で不安でしようがないんですよ」(略)「信じるものがない不安ですね。だから占いを頼ったり、神頼みをしたりするんです。(略)
- (内田康夫『はちまん』)

本稿では、ヲ／ニ格交替が可能な文が存在することを重視し、ヲ格をとる場合とニ格をとる場合の特徴を明らかにすることを目的とするため、ヲ、ニ共起例をひとまず保留し、一文中にヲ／ニ格どちらかのみが明示されたヲ格 256 例、ニ格 969 例を考察対象とする。ヲ／ニ格相当の名詞(句)が助詞ハ、モ(、ガ)で示される例は考察対象から除く。また依拠の内実が文脈で明示されない例もあることから、文脈から依拠内容を確定できるか否かを問わず考察対象とし、一文中に「～ため(に)」「～に関して」等が表れる例は、文脈に明示されるのと同様のものとして、考察対象とする。なお調査範囲内で得られたヲ／ニ格共起例を観察すると、ほぼ「〈内容(依拠目的)／量〉ヲ〈手段／相手〉ニ」という意味関係の例のみであった<sup>7</sup>。

## 2. 中止節におけるタヨル

### 2.1. 中止節における出現様相

タヨルは心理的依拠のみを表す場合もあるが、何らかの目的や希望のもと、その達成のための依拠を表すこともある。～ヲ／ニタヨルの各特徴を見出すためには、後続する事態との関係の考察が一助となるだろう。本稿では一文中での共起関係に限定し、中止節における出現傾向と、共起する事態の種類<sup>8</sup>の2点について考察する。

まず中止節内への出現傾向について、総用例数のうちテ形・連用形中止の割合は、ニ格例が全体の 11.2%(109 例)なのに対し、ヲ格例では 49.2%(126 例)に及ぶ。ヲ格例は相対的に中止節に多く出現する傾向にあると言える<sup>8</sup>。なおタヨルが中止形であれば、後続節と共に他の従属節を構成する例(例(4)(5)等)も中止節の例として扱った。

<sup>7</sup> 「〈場所〉ニ〈相手〉ヲ」という意味関係でヲ、ニが共起する例には以下の例が見られる。

- a. 安房の里見家に従弟の蟹崎十郎どのを頼ろうとする道すがら(栗本薫『栗本薫の里見八犬伝』)
- b. 鈴木天眼を長崎に頼っている。(加来耕三『日本格闘技おもしろ史話』)

しかしニ格名詞(句)が純粹に場所を表すのはこの2例のみであり、タヨル自体に移動の意を含む(「何かを期待して接近する」『日本国語大辞典第2版』)用法(の名残)とも考えることも可能であり、現代語においてはあまり用いられない用法のため、本節では扱いを保留する。

<sup>8</sup> 今回の考察では依拠と他事態との関係を見るため、否定形の中止節は含まない。否定形を含めてもニ格例の中止節は2割程度である。またタヨルに補助動詞が後接する場合も補助動詞が中止形であれば考

(4) 人に頼って生きてるから気が張ってないのか, 紀良は本当によく風邪をひいた。

(横森理香『ワルツ』)

(5) そして生活を求めて, 親類や元檀家であった有力檀那衆を頼って, 山から続々と下山していく坊が多かった。

(重松敏美『山伏まんだら』)

中止節以外の従属節はヲ格例に 76 例(29.7%), ニ格例に 693 例(71.5%), タヨルが主節もしくは単文に用いられる例はヲ格例に 38 例(14.8%), ニ格例に 164 例(16.9%), その他判断に迷う例や項を伴う名詞形がヲ格に 16 例, ニ格に 2 例ある。ニ格例の従属節例に最も多いのが名詞節・連体節で 355 例(36.6%)である。しかし否定中止が 10.9%, その他従属節が 23.9%であり, 大きくどれかに偏るわけではない。

2 点目の共起する事態については, 中止節のうち南(1974)の B 類にあたる継起(と原因理由), A 類にあたる付帯状況を表す中止節に限って考察する<sup>9</sup>。表 1 にテ形・連用形が継起(／原因理由)又は付帯状況を表す際の後続節<sup>10</sup>に用いられる動詞を挙げる。移動動詞や移動を含意する動詞(以下, 移動動詞)には下線を, ヲ, ニに共通して見られる語には囲みを付し, 長期的な営みや生活に関する動詞に波線を付した。二つ以上の動詞にかかる場合, (～動詞)で示した。

【表 1】<sup>11</sup> タヨル中止節に後続する動詞

ヲ格例	ニ格例
あてにする～画策する, あふれでる, 甘えたり攻撃したりする, 行く <sup>7</sup> , 行く～勤める, 行き来する, 生きる, 至る, いる <sup>2</sup> , (身を)うつす, 移る, 送る, 行 <sup>う</sup> (行われ <sup>る</sup> ) <sup>2</sup> , 訪れる, 落ちのびる <sup>4</sup> , 開拓する, 寄宿する, (人に)降る, 来る <sup>6</sup> , 暮らす <sup>2</sup> , 下山して行く, 再就職する, 探す, 刺す, 出奔する, 紹介してもらう, 上京する <sup>5</sup> , 上京する～厄介になる, (～へ行くのに)乗船する, 上陸, 調べる, する(田舎廻りを/転々と/贈り物を/飯の宿と/捨て児) <sup>5</sup> , 座る, 接する, 説明する, 潜伏している, 疎開する <sup>2</sup> , 疎開する～始める, 助けてもらう, 旅立つ, 仕	(成果を)あげる, 歩く, 安心する, 言う, 生かす, 生きる <sup>6</sup> , 維持する, 受け入れる, 討つ, 奪いにいく, 売る, 得る, (誤りを)犯す, 後れを取る, 怠る, 行 <sup>う</sup> <sup>2</sup> , 奢り昂る, (成功を)収める, おろそかになる, 書く <sup>3</sup> , 書き記す, 勝つ, 考える, 聞き入れる, 帰結する, 築き上げる, 切りぬける, 切り離す, (判断を)下す, 暮らす <sup>3</sup> , 遊び暮らす, 企てる, 作製される, 探る, 支えてもらう, 実現する, 実行する, 失敗する, (～を)成就する, 遂行す

察対象とし, 後接動詞が本動詞としても補助動詞としても解釈できる例は除く。後者の例を含めると, ヲ格例では 54.7%(140 例)となる。本稿の調査範囲内ではニ格例には後者の例は見られない。

<sup>9</sup> 本節の目的により, 並列の関係にあるものは含まない。分類は, 内丸(2006)で南(1974)の分類に適用できるとされた「しか～ない」テストなど(付帯状況(A)と継起・原因理由・並列(B)とで適格性が異なる)を主に用い, 南(1974)の A・B 類の条件を参照した。その後, 入れ替えの可否等に照らして並列の関係にあるものを除いた。また本来の目的からは原因理由の関係にあるものは除くのが妥当であろうが, B 類内で峻別することができないため含めてある。並列の例を除いた中止節の, 総用例数に対する割合は, ヲ格例 46.5%(119 例), ニ格例 10.2%(99 例)である。

<sup>10</sup> タヨル中止節の直接かかる節が主節とは限らない。タヨルが直後の節の動詞以外にもかかる判断できれば, 両者の動詞を挙げる。

<sup>11</sup> 各語の後ろに延べ語数を付した。二つ以上の動詞にかかる場合はそれぞれを計上したため, 延べ語数は注 9 の用例数と異なる。

<p>える～なる, 出会う, <u>出入りする</u>, (<u>～へ/旅に</u>)<u>出る</u> 4, <u>出てくる</u> 3, <u>渡航する</u>, <u>取り立ててもら</u>う, <u>逃げる</u> 2, <u>逃げて上京する</u>, <u>逃げ込む</u> 2, <u>なる</u>(<u>なろうとする</u>, 等しくなる含)4, <u>南下する</u>, 入学する 2, 入信する, 任命される, 願い出る, <u>逃れる</u>, <u>上る</u>, (<u>～に</u>)<u>はしる</u>, 働きかける, 果てる, (<u>～に</u>)<u>踏み出す</u>, 蜂起する, <u>亡命する</u> 2, <u>没落していく</u>, <u>まいくりまわる</u>, 見える, 見つけてもらう, 見ている, <u>都落ちする</u>, <u>巡る</u>, 申し出る, <u>持ってくる</u>, <u>戻る</u>, <u>やってくる</u> 3, 破れる, <u>やる</u>, (<u>身を</u>)<u>よせる</u>, <u>留学する</u></p> <p>〈異なり 89 語, 延べ 128 語(複数共起は各々計上)〉</p>	<p>る, 推理する, <u>住む</u>, <u>する</u> 8, <u>生活する</u> 3, 選択する 2, 対抗する, 耐える, 称える, 戦う, <u>叩きに行く</u>, (<u>口に</u>)<u>出す</u>, (<u>生計を</u>)<u>たてる</u>, 試してみる, 調達する, <u>通院する</u>, 使う, 続ける, 提供する, できる, 手に入れる, 事業展開する, <u>飛ぶ</u>, とる, <u>なる</u> 4, (<u>力を</u>)<u>のぼす</u>, 発見し～引きずり出す, 服用する, 振る舞う, 学ぶ 2, 見聞きする, <u>持ち帰る</u>, 求める, 求める～殺す, <u>やる</u>, 立身する, 弄する, 忘れる</p> <p>〈異なり 81 語, 延べ 103 語〉</p>
--	---

表 1 を見ると, まずヲ格例が中止節に現れる際の後続節には, 移動動詞(表 1 の下線を付した語)が多いことが明らかで, 異なり 42 語, 延べ 68 例で約半数を占める<sup>12</sup>(例(6)～(8))。対してニ格例には調査範囲内では移動動詞が 6 例のみである(例(9)(10))。

- (6) (略)兄を頼って上京し, 各種学校であるコンピューター・スクールに入学しなおした。 (清水義範『Y 殺人事件』)
- (7) (略)兄・頼朝の勘気をこうむり奥州平泉の藤原氏を頼って落ちのび, 結局その頼りの藤原氏に衣川で討たれた。 (釣谷真弓『おもしろ日本音楽の楽しみ方』)
- (8) 信尹の幼少期は、各地の武將を頼って転々とする父に伴われ, 京を離れていた。 (前田多美子『四季の名筆』)
- (9) (稿者注: コシジロウミツバメは) 音からだけ想像すれば, すこしは音に頼って飛んでいるのかも知れませんね (畑正憲『天然記念物の動物たち』)
- (10) (稿者注: 通院介助について) 病院内のボランティア等に頼む。それができない時は, 三十分千円～千五百円を支払って介護保険を受けている業者のヘルパーに頼って通院することになる。 (望月宏子『教師になってよかった』)

移動動詞の場合, ヲ格例では後続節の事態の達成前からヲ格名詞(句)が依拠の対象となっている。例えば(6)(7)では, 「兄」「奥州藤原氏」が依拠の対象となる時点で, 移動「上京する」「落ち延びる」は達成されておらず, ヲ格名詞(句)は前提として存在するものの, 移動時の直接的な手段とはならない。実益を供さない心理的依拠を含意し得, 目的地への到着後の金銭・住居などの物理面, 心理面での依拠も排除しない。この例の場合, むしろ到着後の依拠を積極的に表していると言って良いだろう。つまりヲ格例では後続節事態の実現のために, 当該事態の達成以前に依拠し, 事態達成後の依拠の継続も許容される。ヲ格名詞(句)は手段として用いられるのではないため, 金銭, 温情等のどのような点に依拠するか, その内実が明白でない点も特徴である。

<sup>12</sup> 杉本(1991)ではタヨルを準他動詞とし, 「頼る」はヲ格名詞をとることもできるが, それは何らかの移動を伴う場合に限られるようだ(p.249)との注がある。

一方ニ格例(9)(10)では「音」「ヘルパー」に依拠する間のみ「飛ぶ」「通院する」という事態が成立する。(6)(7)のようなヲ格例では依拠主体と依拠先の人物の間の距離が隔たっても構わず、移動中に依拠先(ヲ格名詞)からの援助がなくても良かったのとは異なり、ニ格名詞(句)は後続節事態の主体と同一場面に存在して典型的には直接的な手段として用いられ、依拠した結果または依拠と並行的に、後続節の事態が成立する<sup>13</sup>。

これに関して後続節動詞の限界性(工藤(1995)ほか、日本語記述文法研究会編(2007)の「特定時点成立」)の有無も傍証となる。例えば、「移る」は目的地に到着した時点で事態が成立し、到着前には「静かな場所に移った」とは言えない。このような予め事態の成立点が含まれている限界動詞と動詞自体には明確な終了点が含まれていない非限界動詞という観点から見ると、ヲ格例には限界動詞が約7割(69.5%)。延べ128例中89例見られ特徴的なものに対し、ニ格例では限界動詞は半数程度(49.5%)である。ヲ格例では限界動詞の多くを「行く」「上京する」「落ち延びる」などの移動動詞が占め、ヲ格例における限界動詞の比率の高さは移動動詞による。ニ格例には移動動詞であっても「歩く」などの非限界動詞と、「持ち帰る」などの限界動詞との間に偏りは見られない。ヲ格例は依拠と後続節事態とが同一場面にあることを要求しないため、「～ヲ頼って訪れる」等、ヲ格名詞(句)への到達や接触が後続節事態の達成と同時であったり、過程ではなく達成点に重点が置かれたりしやすく、限界動詞と共起しやすくと考えられる。ニ格例は後続節事態の継続・過程と同一場面で依拠するため、限界動詞に偏らないのだろう。依拠と後続節事態との関係は、ヲ/ニ格例がそれぞれ非限界動詞、限界動詞と共起する場合(例(8)(10))も同様である。

また表1において、ヲ/ニ格例に共通する語(囲みを付した語)に注目すると、意味の抽象的な基本動詞「する」「やる」「行う」「なる」を除くと「生きる」「暮らす」の2語に限られる。この場合のヲ格名詞(句)は固有名詞等で示される特定の人物である(例(11))。一方ニ格例では、非情物名詞(例(12))が10例(「遊び暮らす」を含む)中8例を占め、ヒト名詞は2例のみでいずれも「人」である(例(4))。「人」以外のニ格名詞(句)は暮らしの糧(例(12)「呪術」等)として利用するものであり、移動動詞の例と同様に同一場面にある。(11)ではヲ格名詞がヒト(「憲章」)であり、手段的に利用されるのではない点、依拠の内実が明白でなく心理的依拠を含む点で、移動動詞の場合と同様の差異があると言える。

- (11) 満州国が崩壊した後、連組は大連に戻り、憲章を頼って一緒に暮らしていたが、  
仕事が見つからず、借金生活に追い込まれた (川島尚子『望郷』)
- (12) (略) 彼らは呪術に頼って暮らしており、そのような土地で親鸞は呪術否定(「世間否定)の書を書いていたのである。 (阿部謹也『日本人の歴史意識』)

本節で考察した中止形に限らず、依拠目的が文脈によって示される場合もあるが、ヲ格例の中止節内への出現率の高さや、共起事態の種類、共起事態との関係においてニ格例と明らかな差異があることは重視すべきであろう。調査対象の全ヲ格例のうち、本節で考察対象とした中止節が5割弱(119例、46.5%)あり、そのうちの大半が移動動詞と共起する例

<sup>13</sup> 調査範囲内ではあるがヲ格例にはタヨリナガラ、タヨリツツの例が見られない。ニ格例には少数であるものの用例が見られ、ヲ格例に出にくいという事実はこの指摘を支えるものだとと言える。

である。移動動詞が多数を占める理由に関しては、通時的観点も含め今後検討を要するものの<sup>14</sup>、～ヲタヨルと移動動詞の親和性は高いと言ってよいだろう。

## 2.2. 観察結果のまとめ

以上のように～ヲタヨルは後続節の事態の生起前から達成後までのヲ格名詞(句)への依拠を許容する、つまり後続節事態と同一場面にあることを要求しないと考えられる。このことを(13)で確認したい。(13)aはヲ格例で、「千代子」が満州の兄の元へ行くことは読み取れるが、この文のみでは渡航時に兄から金銭等の実質的援助を受けることは(この例では文脈からも)含意されない。(13)bは(13)aをニ格表示にしたものである。(13)bはヲ格例と異なり、乗船に際して、兄から乗船料金や切符の手配等、金銭その他の援助を受けたとの解釈に傾くと思われる。(＃は解釈が異なることを、??は許容度が低いことを示す。)

(13)a. 大阪の女学校を卒業した母(俵千代子)は、淀屋橋にある生命保険会社に勤めていたが、昭和十四年八月に(稿者注：満州の鞍山市に本社がある)昭和製鋼所の兄を頼って神戸から乗船した。(略)上家は千代子の兄の部下となり、会社の連中とともに上司の家を訪れて、酒を飲み交わすうちに千代子と知り合った。

(上家富靖『一番大きなお星さん』)

b. # 鞍山市の昭和製鋼所の兄に頼って神戸から乗船した。

c. 鞍山市の兄 {??を／に} 頼って神戸から横浜へ向かう船に乗った。

これはヲ格例ではタヨルの主体(千代子)が「乗船」する時点ではヲ格名詞(兄)を“あてにする”だけで必ずしも実際の利用が含意されないこと示すと考えられる。ヲ格名詞(句)の場合、具体的な利用を想定しない文脈でも使用可能、つまり金銭、助言、存在自体等、依拠の内実が比較的明白でなくても良いと言える。

さらに(13)aは渡航後の依拠も含意でき、実際に文脈から千代子が渡航後、兄の家に暮らしていることがわかる。ニ格例(13)bでは渡航後の依拠を読み取ることはできず、普通、依拠は乗船が達成されるまでだと解釈されるだろう。兄が渡航先にいない場合を考えると((13)c)、ヲ格例では不自然なのに対し、ニ格例では許容される。

～ヲタヨルが後続節事態の成立・達成前後の依拠を許容し、～ニタヨルが依拠と後続節事態との同一場面性を指向するという本稿の指摘は、先行論が両格をとる感情動詞について述べる、ヲ格：持続的感情と、ニ格：一時的感情という対立に矛盾しないが、タヨルにおいてニ格例は一時的というよりも同一場面であることが重要だと考えられる。

## 3. ヲ／ニ格名詞(句)の意味分布

本節では1.2.で考察対象と定めた全例を対象にヲ／ニ格名詞(句)の意味分布を観察する。ヲ／ニ格例には名詞(句)がヒト名詞類か否かにおいて対照的な分布が見られる。表2はそれぞれ上段が延べ語数、下段が割合を示す。なお、名詞が二つ以上並列されている場合(例：

<sup>14</sup> 近世期におけるタヨルの中心的用法は、タヨル自体に何らかの移動を含意したものが多く、明治期に現代語のような意味・構文が中心になったようである。詳細な検討は機会を改めたい。

抑制やつなぎ服に), それぞれを計上したため, 1.2.で示した総用例数とは合計が異なる。ヲ格名詞(句)の場合, ヒト名詞と, 組織・国(省庁, 会社, 団体など含む社会集団), 関係(つて, 縁など)のヒト名詞類<sup>15</sup>が9割近く(88.2%)で, 特にヒト名詞が70.0%(184例)と多数を占める。一方ニ格名詞(句)はヒト名詞類が約2割に過ぎず, 非ヒト名詞類が8割弱(78.0%)であり, ヲ格例と対照的である。ニ格例では, 典型的には実利用できるモノである具体名詞のほか, 抽象名詞や「デキゴト名詞」(影山2011)<sup>16</sup>も多く見られ, 幅広く分布する。

【表2】ヲ/ニ格名詞(句)の意味分布<sup>17</sup>

非ヒト名詞類	具体物(うち金銭)	身体・感覚	力	技術	手段・方法	理論・システムなど	その他抽象物	抽象物合計	デキゴト	その他(何など)	非ヒト名詞類合計
~ヲタヨル(263例)	8 3	0 0	6 2.3	1 0.4	0 0	0 0	9 3.4	16 6.1	4 1.5	3 1.1	31 11.8
~ニタヨル(1069例)	281(32) 26.3(3.0)	14 1.3	91 8.5	31 2.9	29 2.7	19 1.8	191 17.9	375 35.1	166 15.5	10 0.9	833 77.9

ヒト名詞類	人(誰等含む)	組織・国など	関係	神仏	ヒト名詞類合計
~ヲタヨル(263例)	184 70	22 8.4	21 8	5 1.9	232 88.2
~ニタヨル(1069例)	165 15.4	59 5.5	2 0.2	11 1	237 22.2

### 3.1. ヒト名詞類

以下に人((14)(15)), 組織((16)(17)), 関係((18)(19))を表す名詞(句)の例を示す。

- (14) (略)三好義継は河内北半国の主, そして義昭の妹を妻としていることから, 義昭は義継を頼ったものと思われる。(湯浅治久『戦乱の日本史』)
- (15) (略)紫の上がたいそういじらしい御様子で, 心から源氏の君に頼りきっていらっしゃるのを, 振り捨てて出家することは, とてもむずかしいことなのでした。(瀬戸内寂聴訳『源氏物語』)
- (16) (略)戦地から引き揚げたものの身の置き所を決めかねている俳優がとりあえずNHKを頼ってきた, といったケースも少なくなかったが, 多くはNHKの東京放送劇団の人達であった。(能村庸一『実録テレビ時代劇史』)
- (17) 率直に現実を直視し, どのような年金プランが自分たちの源泉に必要なのか, 厚生省に頼らずに考えるべきだ。(中田謙司『税金を払おう』)
- (18) K先生は大学は出たけれど, 工学部出身では就職先がなく, 仕方なくツテを頼って先生になったのだ。(河野實『メダカはどこへ』)
- (19) 上下関係に頼らず, 子どもとどう関係を結ぶのかが問われている。(氏岡真弓『学級崩壊』)

<sup>15</sup> ヒト名詞に準ずると捉えられることの多い組織・国等に加え, ヒト(の存在)を想定できる「関係」を含むため, 「有情物」とはしない。

<sup>16</sup> 何らかの事態(「発展」「試験」など)やイベント・催し物(「発表会」など)を表す名詞を指す。調査対象の用例中では, いわゆるサ変名詞が中心だった。

<sup>17</sup> その他には土地, 節, 内容を含む。ニ格ヒト名詞には有情物として動物1例を含む。



組織・国に分類した例において、ヲ格名詞(句)は多くが(16)のように「NHK」「病院」等の会社名や団体・施設名である。ニ格例には「厚生省」(例(17))等の中央機関や、ヲ格例には1例しか見られない国名が多数あり、これらは組織図にすると上位に位置するような、ヲ格名詞(句)より大きな組織・集団である。ヲ格例はより下位の組織名詞を取り、ヲ格例でヒト名詞の割合が高いことと関連した現象だと考えられる。

また、(20)(21)のような「人」をとる例や、一般的記述としての例においてヲ/ニ格例は近接する。総称名詞「人」をとる場合、ニ格例においても(21)のように、生きることや生活全般において等、依拠の内実が広範に及ぶものが多く、2節で見たヲ格例の特徴と重なる。

(20) ひとりで暮らせないんです。恥かしいけれど、あなたとはちがって、ひとを頼ることしか知らない。  
(津島佑子『私』)

(21) 人に頼って生きてるから気が張ってないのか、紀良は本当によく風邪をひいた。  
(4)再掲

### 3.2. 非ヒト名詞

ヲ格名詞(句)にヒト名詞類が多いのと対照的に、ニ格名詞(句)の8割近くが非ヒト名詞類である。非ヒト名詞類のニ格例を(22)(23)、ヲ格例を(24)に挙げる。ニ格名詞(句)が具体物の場合、実際に利用できる道具的なモノが多く見られる。抽象的なニ格名詞(句)の場合は、具体名詞と同様の道具・手段的なものと見なせる例(例(22))のほか(23)に見るように、何かを行うに当たって基盤とするものと捉えられる例があり、「理論」「手段・方法」「技術」に分類した例に典型的である。これらは何かを行う時点において依拠する背景や基盤と捉えられ、前提性と同一場面性を有すると言える。この前提性は2.で見た移動動詞と共起するヲ格例にも見られた特徴である。

(22) 国際的な悪質商法もある。こうしたケースでは、一つの自治体の窓口だけで入手できる情報にたよって消費者相談をしていたのでは、適切な情報提供はできない。  
(村千鶴子『消費者はなぜだまされるのか』)

(23) (略)一徹で野性的な、なにやら御しがたい童児として生きぬいた画家だと見るべきだろう。だからよくある芸術家無垢説にたよって瑛丸を称えてみてもはじまらない。  
(巖谷國士『封印された星』)

(24) (略)ガイド(稿者注：鐘の譜)があるときは、そっちを頼って、休みの数はかぞえないのが、オーケストラ奏きの習性だから、(略)  
(林光『私の戦後音楽史』)

もう一点、ニ格例に特徴的なのがデキゴト名詞である。ヲ格例には4例しか表れないが、ニ格例では166例(15.5%)得られる(表2, 例(25)(26))。

(25) もちろん小沢氏の健康問題とか、今日の朝日新聞に載ったような彼の汚職の問題とか、こういう敵失によって状況ががらりと変わる可能性はあると思います。し

かし敵失を頼って私たちが黙って見ているには、あまりにも状況は深刻であるということをやむを得ずとも考えていただきたいと思います。

(浅井基文『平和大国か軍事大国か』)

- (26) (略)これに対抗すべく、加藤清正、福島正則、浅野長政などの尾張生まれの従来  
の秀吉側近を中心とするグループは北政所の庇護に頼り、両者は秀吉の生前から  
対立反目を続けていた。  
(来水明子『人物日本の女性史』)

ヲ格デキゴト名詞の例では1例を除き否定と共に起るか、名詞が未実現事態を表し(例(25))、依拠時点での実益を伴わない。ニ格例にも否定形や未実現事態を表す例があるものの、(26)「北政所の庇護」のように名詞(句)の事態が実現(・継続)されている限りにおいて依拠する例が多数存する。

#### 4. 考察及びまとめ

##### 4.1. まとめ

以下に～ヲタヨル、～ニタヨルそれぞれに本稿で観察された差異(①②)と、そこから導き出した意味特徴(A～C)をまとめる。

- ①ヲ格例は中止節内に偏って出現し、その場合、後続節に移動動詞を伴う例を典型とする。ニ格例は中止節に現れにくい。中止節内の用例の場合、後続節の動詞はヲ格例では限界性のあるものが多数を占める一方、ニ格例では偏りが見られない。
- ②ヲ格例ではヒト名詞類をとる例が9割近くを、ニ格例では非ヒト名詞類をとる例が8割弱を占め、対照的である。

A: ①より、中止節内の例の場合、～ヲタヨルでは後続節の事態の成立・達成の前後に渡って依拠が継続されて良い。～ニタヨルは、依拠の結果または依拠と並行して、後続節の事態が継続または達成される。

B: ②、Aより、

【～ヲタヨル】ヲ格名詞(句)は依拠の前提であり、依拠によって行われたり引き起こされたりする事態と同一場面に存在しなくて良い。事態の成立・達成後も依拠し続ける場合や心理的依拠の側面が大きい場合も許容され、特にその際は依拠の内実が明示されない。

【～ニタヨル】ニ格名詞(句)は依拠と同一場面に存在し、手段または基盤としての利用を想定される。依拠の内実が明らかでない場合が多い。名詞(句)の非情物への偏りが顕著であり、この点でヲ格例と対照的である。

C: ニ格名詞が総称名詞「人」である場合を典型とする、依拠の内実が明示されない(全般に関して依拠すると解釈できる)例において、ニ格例とヲ格例が近接する。

##### 4.2. 考察及び課題

心理的依拠の側面が大きい場合、～ヲタヨルで表されるという点は、寺村(1982)でヲ格をとる感情動詞を「より純粋に心の感情の状態を描くもの」とする指摘と矛盾しない。タ

ヨルは物理的依拠も心理的依拠も同時に表し得るが、～ヲタヨルにおいて心理的側面が前景化しやすいと言える。

また、ヲ格例では依拠の内実が明示されないという点に関して、(27)を参照しよう。

(27) 花子は彼 {のこと／ $\phi$ } を頼っている。<sup>18</sup>

田窪(2010)は名詞＋ノコトについて、「なんらかの形で名詞(句)の指示物と関連付けられる出来事のいくつか、あるいはすべてを意味する」「属性抽出標示」(pp.131-132)であるとする。(27)のようにノコトの付加が可能なることから、～ヲタヨルは名詞(句)に属性も、個体そのものもとれることがわかる。ノコトが付加されない場合、どちらの読みも可能であり、文脈で示されない限り、内実を明示しない例としての解釈が可能である。

なぜヲ格例がヒト名詞類との共起に傾くのか、移動動詞と共起しやすいのかについては様々な角度からの考察が必要だが、有情物が、非情物と比較すると手段・道具としての利用を想定しにくく、一方で資金、衣食住など多面的に依拠の対象となり得ること、またヒト名詞類は依拠(依拠主体)と同一場面にない場合も無理なく成立すること、タヨルが近世まで移動や人に言い寄る意を中心を表していたことと関係する可能性がある。特に三つ目に関する考察は今後の課題とするが、中止節の例への集中とヒト名詞をとる例への集中とは強く関連すると考えられる。ヒト名詞の場合、非ヒト名詞に比して、何に、もしくはどのように依拠するかという依拠の内実が明示されず、それを後続節で補う必要があることが多いと推測できる。当然ながら主題や前文脈等で補う例もあり、他の要因も絡むだろう。その一つとして「叔父を頼りに上京する」のような「～を頼りにV」文の存在が、ヲ格例の中止節に集中する理由の一つである可能性が考えられる。「～を頼りにV」文は、タヨルと同資料の調査で400例強が得られ、単純に用例数だけを比較するとヲ格例より多く用いられている。この「～を頼りにV」文との形式の類似によって、後続節を伴う場合、～ニタヨルよりも～ヲタヨルの方が表れやすいのではないか。またタヨルが近代以降、移動の意を表しにくくなっていったこととも関係する可能性があるが、いずれの可能性も現段階では推測の域を出ない。機会を改めて考察したい。

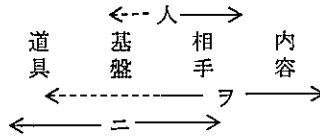
下の図1・2はタヨル文の依拠対象となる名詞の意味分布について整理したものである。図1は表2で示した名詞分類に若干の整理を加えたもので、図2には、図1の分類を抽象化して整理し直したものと、格形式との対応を示した。図1には図2との対応を示してある。具体物と、抽象物で道具として利用されるものを「道具」、背景・前提として依拠される、理論、手段・方法、技術を「基盤」、ヒト名詞類を「相手」として整理し、その他ヲ格のみに見られた「老後(を頼る)」のような名詞(句)を「内容」として加えた<sup>19</sup>。図2に見るように、「相手」と解釈できる例と、背景的「基盤」と解釈できる例においてヲ／ニ格例が近接、重複し、前提性の面で共通点を有すると考えられる。

<sup>18</sup> 随意的なノコトは対格あるいは主格にしかつかないとされ(田窪2010)、～ニタヨルにもノコトを用いることができない。

<sup>19</sup> ヲ格例が「内容」をとるのはヲ、ニ共起例がほとんどを占める。

具体物	身体・感覚	力	技術	手段・方法	理論・システムなど	その他抽象物・デキゴト	人・神仏	組織・国など	関係
↓		↓					↓		
道具(・基盤)		道具・基盤					相手		

【図1】名詞分類の整理



【図2】名詞の意味分類を指標としたㄨ／ニ格例の関係

ㄨ格例は、(文脈で示されることはあるものの)～ㄨタヨルだけでは依拠の内実を明示しないものが多かった(B)。つまりㄨ格名詞(句)の様々な面に依拠する可能性を有した表現だということである。これにはタヨルのㄨ格表示には、動作性が高い、または影響が具体的であるという点ではなく、タヨルの表す事態の関与・影響がㄨ格名詞全体に及ぶということが関わりと考えられる。関係を明らかにすることは今後の課題とするが、この点に関して Sugamoto(1982)は「道{に／で／を}歩く」の対照等から、移動動詞のㄨ格補語に影響の全体性を指摘し、ㄨ格表示と他動性の高さの相関を指摘する。杉本(1986)でも移動補語を含むㄨ格名詞の共通性として影響の全体性を指摘している。本稿の考察から、対象への影響がわかりにくいタヨルでも全体性が共通すると言える<sup>20</sup>。一方ニ格は多様な用法を持つ。その相互関係やㄨ格との関係等については、他の両格を許す動詞における様相の記述を積み上げた上で考察したい。

本稿ではㄨ格例、ニ格例の検討により考察を進めたが、1.2.で留保除外したㄨ／ニ格共起例に関しても図2に位置づけることができる。1.2.で述べたように共起例は「〈内容(依拠目的)／量〉ㄨ〈手段／相手〉ニ」という意味関係に限られる。図2に示したように、ㄨ／ニ格の一方のみをとる場合、「内容」はㄨ格で表示され、ニ格で表示されることはない。ㄨ、ニが共起する場合、任意に分担されるのではなく、ㄨ格が図2の右端の領域(内容)のみを担い、ニ格が左側(手段・相手)を担う。意味分布が重なることのない部分で棲み分けがなされ、共起が可能となっている。

今後、「頼りにV／頼りとV」文との関係<sup>21</sup>、タノムとの関係、またタヨル以外のㄨ／ニ格両用動詞の格選択の要因を明らかにすることを課題としたい。

<sup>20</sup> 本稿では～ㄨタヨルの他動性の高さについての判断は保留する。ただ、タヨルだけを見た場合、～ㄨタヨルの方が～ニタヨルよりも他動性が高いと積極的に言える材料は少ないように思われる。

影山(2011)ではㄨ／ニの交替を許す動詞の一つにタヨルが挙げられ、「に」=「全体的・直接的作用」、「に」=「部分的・間接的作用」という差異が感じられる(p.145)とするが、本稿の考察から、～ㄨタヨルに関してはむしろ「直接的作用」ではないと言えそうだ。

<sup>21</sup> 「～を頼りに」にはスル以外の動詞が後接する例が多い。また「頼りとV」ではスルが後接する例にほぼ占められる。

参考文献

- 秋元美晴(2010)「コーパスに基づいた「触る」の分析：他動性との関連から」『恵泉女学園大学紀要』22
- 浅山佳郎(2000)「感情動詞の補足語の格と感情形容詞」『神奈川大学言語研究』22, 神奈川大学言語研究センター
- 内丸裕佳子(2006)「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2(1), 日本語学会
- 影山太郎(2011)編『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト:現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 定延利之(2006)「動態表現における体験と知識」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新天地 平1 形態・叙述内容編』くろしお出版
- 佐藤響子(1997)「二格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』48(2・3)横浜市立大学学術研究会
- 杉岡洋子(1992)「心理述語についての考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24, 慶應義塾大学言語文化研究所
- 杉本武(1986)「格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- (1991)「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 田窪行則(2010)『日本語の構造 推論と知識管理』くろしお出版
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法 3 アスペクト；テンス；肯否』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, 国立国語研究所
- 森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- BANDO, Michiko (1996) “Semantic Properties of -Ni NP and -O NP of Japanese Psych-verbs” 『大阪大学言語文化学』5, 大阪大学言語文化学会
- Sugamoto, Nobuko (1982) “Transitivity and Objecthood In Japanese”, *Studies in Transitivity, Syntax and Semantics* vol.15, ed. by Paul. J. Hopper, Sandra. A. Thompson, Academic Press, New York

調査資料

中納言『現代日本語書き言葉均衡コーパス』, 国立国語研究所, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

